

<講 演>

「分からないこと」の大切さについて*

金 丸 由 雄

こんなに大勢の前で、しかも1年生の前でお話するのは何年ぶり、10何年ぶりかであります。これは川本先生もおっしゃられたとおり順番でございまして、年齢順でして、何年も前から私が今日お話しすることは決まっておりますが、実は今週のはじめに風邪をひきまして、それで今朝、このためにかけたようなわけで、どんな話になるかわかりませんが、今日私がみなさん方にお話ししようと思いますのは「わからないことの大切さ」ということです。

わからないことということとはとても大切なことでして、私の考えからゆくと、わかることというのはそれほど重要でない。非常に逆説的に聞こえるかもしれませんが、私は決してそうは思いません。私が今まで逢った偉い社会学者が何人かおります。私は大学院をアメリカでやりました。私の大学院の頃は社会学はアメリカが世界一で、今だにそうだと思いますけれども、その中の最もすごいと自他共に許していた先生方の何人かにお目にかかる機会がありましたが、その先生方に特徴的なこととは、実に簡単に“I don't know.”とか“I can't answer your question.”とかおっしゃることです。決してわからないことをわかったようなふりをしないことです。それから思うと日本の大学の先生方は、そう言っちゃあれですが、わからないということをおっしゃらない。これはとても、特徴的なことだと思います。ですから私は、わからないことをはっきりおっしゃる方はえらい方だというふうに思います。私にもわからないことがたくさんあります。

実は私が大学院生の2年の時に、あるひとつの図式を考え出しました。それ

* 本稿は平成元年度新入生オリエンテーションにおける講演の要旨である。

をちょっとこの黒板を使って書いてみます。それは簡単な4分割表なのですが……（黒板に書く）

アメリカで学生をやっていたころのもので英語がうまく日本語になるかどうか分かりませんが。縦の軸は時間です。横の軸は空間です。空間といっても、社会的空間ですけれども。この空間を簡単に2つに分けたのですが、こちらがシステム内です。この頃、やたらにシステムという言葉が流行っていますが、社会学でいうシステムというのは、social system として、社会体系と訳していますが、私には体系という訳がいいかは疑問ですけれども、まあ、簡単に言ったら、集団とか又は人の集まりだと思って下さい。単なる集まりではなくて互いに関係のある人々の集まりです。こっちの方はシステム外です。時間のほうは、Ever Existed（過去に存在したことがある）と、Newly Made（新しく作ったもの）。これはですね、なぜこのようなものを作ったかと言いますと、私はこの時、人間の救われるということはどういうことか、その頃、宗教社会学の講義を受けたこともあって、そんなことを考えていたのですが、この表によって救いのタイプを考えていたのです。

こっちの方は、システム内の過去に既に存在していたある考え方であるとか、特定の社会体系とかを受容することに依って、自分が今まで問題としていた事柄を解決するというのがI番目の枠、Restorationです。例えば明治維新、これは英語では、Meiji Restorationと言いますが、もう一度建て直すということです。システム外でかつて存在したことのものは、Assimilationです。この言葉は文化人類学などでよく使われますが。みなさんが着ているのは西洋の服装で、100人が100人そういうのを着るようになったのは、戦後のことでして、私の母などは長い間、着物しか着ておりませんでした。戦争前に、母がムーミーのようなものを着るのですがそれは避暑に行って、暑いものですから、帯をしめるのがきつかったからです。そのくらいのもので、このような服装もひとつのAssimilationですね。

システム内で新しく作ったものを私はRevolutionと名づけました。次にこのシステム外で新しく作るというのは、経験的に空の箱だろうと最初は思ってい

ました。私の大学院の学生の頃は、このような図式を作るのが流行でしたし、今は少なくなりましたが、ねこもしゃくしもといっでは何ですが多かったものです。私もそれに便乗しました。それこそ Assimilation ですが、その時、私はニューヨークに住んでいたのですが、たまたま私が住んでいたのは、International House というニューヨークの大きな大学のそばにある国際会館、寮みたいなもので、各国の学生たち、先生方も泊っておられました。その当時、東京大学の梅津八三という大心理学者がおられて、梅津先生と私は、だんだん仲がよくなって、今だにおつきあいさせていただいてる次第です。私が誰の門下生かということになると、自分で勝手に決めているのですが、梅津門下だと思っております。私が今までお目にかかった学者の中で一番頭のよい、一番よくおできになる、洋の東西を問わず、それが梅津先生だと思います。それで梅津先生に見て頂いたら、たいへんほめてくださいました。けれども、このボックスが一番大切だと……。 でわからなかったです。ずっと考えつづけておりました。これを作ったのは26、7才の時で今からかれこれ30年も前のことで、今だにある意味ではなぞですけども、私はこの頃になって、ようやくわかったような気がします。梅津先生はその時、おっしゃってましたけれどこれこそ本当の Revolution であると。ですから私には折にふれてこの問題を、自分が25か6の時、考えついたものを、わからないわからないと言ってきたようなところがあります。ですから、そういう意味では、わかったことというのは、瞬間的に忘れてしまうもので、わからなくていつまでも考えつづけさせられることを、たぶん哲学の言葉で、type phenomenon というのだと思います。type phenomenon は日本の哲学辞典をみても、載っていないのですが、私の勝手な解釈では、ちょっとキザっぽい言い方をすれば、その問題を通じて自分が世界とつながっているということ、そういう問題だと思っております。

私のそのわからない話はイントロでありまして、実は、科学の論理学の立場で、偉い論理学者で、カール・ポPPERという学者がおります。

私が大学院の学生のころ、カール・ポPPERの本で *The Logic of Scientific Discovery* だと思うのですが、『科学的発見の論理』と言うんでしょうかそうい

う本がありまして、日本語の訳もでてると思うのですが、それを読まされたような記憶があります。ポPPER先生に言わせると、ポPPER先生の立場というのは、ある意味では非常に極端なんですけれども、ある事象（現象）aはもうひとつの現象Aの原因であるとは決して証明できない。それは非常に簡単でありまして、時間的には当然aが先におこってAが後におこるわけですが、でもこれは本当の原因ではなくて、Aの原因となりえる現象はb、c……nまでありうる。nはどんどん大きくなるわけですが。ですから、我々にはこういうふうにみえているけれども、aは実は本当はAの原因ではなくて、bからnまでの、我々の気が付いていない未知の事象が本当の原因である。

こうなってきますと、科学というのはいったい成り立つのかという、そういう大問題にたち至ります。科学と言っても、いろいろな実験的条件をコントロールできる物理学であるとか近頃では生物学などそういう意味では大発展をとげたわけだけれども、心理学ではずいぶん実験的にコントロールできるわけですが、社会学では、なかなか実験はむずかしい。なぜかと言えば、社会という現象は実験になかなかむいていないんですね。ということは条件をコントロールしにくいということです。ま、しょうがないので、比較ということを行って実験の状態に近いようなふうにして、何かものを言おうというわけでありまして。こういうポPPERのような極端な立場があったとします。これですと一步も進めないことになってしまうので、どうするかというと、これまた西洋人で、ポール・ヴァレリーという、大分昔に亡くなったフランスの大詩人兼哲学者が居られました。ポール・ヴァレリーさんの、私は別にフランス哲学の専門家じゃないのですが、有名な論文がありまして、それは「レオナルド・ダ・ヴィンチの方法についての序説」という論文であります。もちろん原文はフランス語でありまして、私の第2外国語はフランス語でありますけど、私は日本語の翻訳で読みました。

レオナルド・ダ・ヴィンチはみなさん御存知でしょうが、15～16世紀にかけて活躍したフローレンス生れというかフローレンス近くのヴィンチという村の生れで、多分世界中の画家で一人あげろと言われたらレオナルドがあげられる

と思います。レオナルドさんは完全主義者で、これが確かにあの人の筆だという絵は、カルトンなんかは別です、スケッチなんかは別ですけれども油絵は十数点しかないだろうといわれています。例えばパリのルーブル美術館にあるモナリザ、又はラ・ジョコンダの肖像、あれなんかはいつ見ても飽きない立派な絵ですけれども、一説によれば4カ月、もう一説によれば4年間かかったといわれています。あの人は完全主義者でありますからしょっちゅう手を入れるんですね。バザーリというダ・ヴィンチよりも一世代後のこれもまあ相当の画家ですけれども、この人が書いた伝記、当時のミケランジェロだとかそういう大画家達の伝記があります。それによるとレオナルドが有名な最後の晚餐の仕事をしている時にその仕事ぶりを見ていた人の証言があります。僕も今から20年以上前にこの壁画のある教会に行って見てきましたけれども、非常に剝落だとかそういうのがひどくって当時の状態とはだいぶ違ってるとは思いますけれども、それでもレオナルドの素晴らしい力っていうのは時の障害を越えて迫ってくるように思いました。そのレオナルドさんはですね、しょっちゅう外に出掛けているんだそうです。そしてその部屋にやってきちゃあ一筆二筆描くとまたどっかへスーッと出掛けていっちゃう。初めて僕がこの話を読んだ時はよく分らなかったですけれども、自分で言うのはおこがましいですけど、仕事を、勉強の方の仕事ですけど、やり始めると分るような気がします。机の前に座ってて良い考えが浮かんだことはないですね。もちろん机の前に座ってて本を読んだりなんかするんですけど、散歩している時とか電車に乗ってるときとか自転車に乗ってるときとかに、フッと今までわからなかった事にちょっとアイデアが出てくるというような事は良くあります。

このレオナルド・ダ・ヴィンチを、ポール・ヴァレリーさん、ヴァレリーさんだって偉い芸術家でありますけれども、レオナルドと比べたら、どっちが偉いかということは最初から分っている様なものだと思いますが、どうやってレオナルド・ダ・ヴィンチを理解しようかということですね、ポール・ヴァレリーさんはこういう言葉で書いております。ちょっとゆっくり読みますけれども、別に書く必要はありません。「我々は、彼もまた、(彼というのはレオナル

ドのことです) 思考したと見え、そして実は、我々が彼に帰した思考であるものを、彼の業績の中に再び見出すことができるのだ。」フランス語ですから、もってまわった言い方ですけれども、ポール・ヴァレリーさんの大前提っていうのは、レオナルド・ダ・ヴィンチもポール・ヴァレリーも考えたという意味では同じだ。そして、それから先どうやるかという、自分の考えを結局、あのレオナルドさんの考えに重ね合せているので、これがその我々が彼に帰した思考である。彼に帰したものであるというのは、要するに、これはレオナルドの考えだというふうに我々が考えているその考え方をですね、自分もまたレオナルドと同じように考える人間であると考えたことによって、彼の業績の中に再び見出すことが出来るのだというわけです。ということは平たく言うと、こんなことをもしポール・ヴァレリーさんに言うとお前はおれの考え方を全然間違えていると言われるかも知れませんが、私の考えでは要するに自分の考えを、理解しようとする人の考えの中に見つけ出す他に方法はないんだということでしょうね。

皆さん方が、心理学、福祉学、社会学に進まれると、多分仮説という考え方を学ばれます。仮説というのは仮の説でありますけれども仮説というのは、そうですね、色んな仮説があるんですけど、社会学で一番有名な仮説というのは、自殺率と社会的な統合度、社会的統合度というのは、難しい概念でありますけれども、その二つの間の相関関係についてのものですが、これは、デュルケムという偉い社会学者が考え出した考えであります。社会っていうのはですね、人々が統合されている、統合されているというのはですね、互い同志、親密な関係にあると言ってもいい、簡単に言えばですね、と思うんです。余り親密すぎても自殺率が増えるし、それから余りに稀薄であっても、自殺率が増えるというふうに言ったのです。彼がこの仮説をどうやって見出したかというのは、これまた難しい問題であります。でも、僕らもまた仮説を使って現象にそれを重ねてそれを見るわけです。そして、相当この仮説でもって現象が説明出来るというふうになると、僕らはその現象を分ったような気持ちになるわけです。

でも先ほどの、その最初に言ったカール・ポPPERさんのですね、あの意地の悪い謎はついてまわるんですがね。本当に仮説が正しいかどうかは決して分らない、だからそれが仮説なんです。科学というのは常に仮説です。それは社会学とか心理学・福祉学だけではなくて、物理学のような精密と考えられている学問ですらそうですね。もうとっくの昔に亡くなりましたけど、アインシュタインという偉い物理学者がおられました。アインシュタインさんはアイザック・ニュートンが、17世紀に考え出したというより証明した万有引力の法則というのが、うまく当てはまらない、万有引力というより、その万有引力を含むニュートンの体系が当てはまらないような現象が出てきて、それを説明するために考え出されたのが相対性理論と言われているものであります。しかし近頃の観察結果によりますと、相対性理論では説明できない現象も現れている、我々が生きている世界というのは、そういう世界だろうと私は思います。どんなに立派な理論を作ったって説明しつくせないというのが、ま、もっともらしい言葉を使えば、存在というものの性質だというふうに思います。だけれども、それに迫っていくためには、今申し上げましたポール・ヴァレリーさんも書いてるような方法しかないんですね。こういうことを考えたのはポール・ヴァレリーさんだけではありませんで、日本にも偉い人がいます。

例えば、僕が好き、好きというか尊敬している学者で、前野良沢という方がおります。解体新書って皆さん習ったでしょ。解体新書を翻訳したのは、杉田玄白と前野良沢と普通の教科書では出ていますが、本当に翻訳したのは前野先生です。どういうわけか、前野良沢になると前野先生と言いたくなるのですが、杉田玄白は語学は全然出来ないんです。あの人がやったことは言わば編集者ですね。あの前野良沢さんがですね、やった仕事で、出版されたものは解体新書しかない、しかも解体新書には、自分の名前を載せることを拒んだんですけれども、他の著作は実は全部手で書いたものなんですね。当時は、出版されるということもありましたけど、手で書いて、手写本で写して、だんだん流布していくということが非常に多くありました。私がこれから御紹介しようと思っているのも手写本でありますけれども、これは「オランダ約文略」というふうに

読むと思うのですが。(黒板に書く) このまあ本といいますか論文の名前はこういうやつで和と蘭でオランダとあてておりました。ですからオランダの文を翻訳するそのためのアウトラインとっていただければいいと思うんですけども、僕はこの文章を読んだ時にさすがに前野先生は偉いと思ったんです。あの江戸時代の口語文ではなくて文語文ですからですね。そのままちょっとゆっくり読みます。「夫」それっていうのは、文章書きおこしの時にそれなになにというふうに言ったんですがね。英語で言えばNowとかいうように言ってもいいと思いますけれども。「夫、俯シテ公廩タル宇宙ノ図書ヲ察スルニ、其方境分裂スルガ為ニ遂ニ区々トシテ、各私ニ其書契ヲ造ル。」これを、現代語にざっと訳すと、広い世界の、いろんな本を考えてみるに、世界が国や地方に分裂しているために分裂した地方地方でもって、自分達で勝手に字を作った、言葉を作ったとなりましょう。「蓋シ彼モ一俗ヲナシ、此モ一俗ヲナス。」彼というのはこの場合オランダ語と考えていいと思いますけれども、オランダ語も地方の一つの俗語だ、そして我々が使っている日本語もまた一つの俗語だ。「判然トシテ混同スベカラズト云ドモ、今ヤ此ヲ以テ彼ヲ学バント欲スル。即專、此ヲ以テ彼ヲ推ニアリ。」要するにオランダ語と日本語は俗語だと、地方地方の言葉だと言ってるんです。世界語ではないということです。であるからして、これをはっきりと区別しなきゃいかん、混同してはいけない。にもかかわらず、今自分の使っている日本語というものを基礎としてオランダ語を勉強しようとするならば、そしたら、どうやってやったらいいか、ただ一つ方法がある。要するに自分の言語から推測してオランダ語を勉強する他ないんだといってますね。ちょうどそのヴァレリーさんの言ったのと同じでしょ。自分もまた彼もまた考えたんだと。ですから我々が彼のものだと考えている考えを、実は我々が彼の中に見い出すんだと。ね、偉い人はみんな似てますよね。困難に立ち向かった人達です。前野良沢という人はですね、前野良沢の信用のできる伝記は一つしかなくて、岩崎克己という偉い先生がお書きになっている、岩崎先生はこれは戦争中に自費出版されたんですけども、岩崎先生はついにどこの大学でも教えることがなかったですね。だけれども書かれた物は実に素晴らしい物です。

うちの図書館に2部入ってますから、是非、折を見て、見てみるといいと思います。前野先生のような偉い人、このようにして勉強する人は偉い人なのかも知れませんね。とにかく方法は似てるでしょ。自分でもって自分の考えを相手に投影して、理解するより他やり方がないと、世界っていうのはそうなんです。もの自体っていうのは認識出来ないとか何とかいう難しい立場があるようですけれども、僕らの方法っていうのは結局、何か知らないですけれども頭の中で作ったもので、それでもってそれを我々が観察する現象に当てはめてみて、ああこれでいいんじゃないかという、その方法ですね。実はこのことを言いたかったんです。

ここで、蘭学、前野良沢さんが出てきたんで、その蘭学のお話をちょっとしてみたいと思います。実はその蘭学というか洋学というか、私はそれで学位論文を書いたのですが、それをあまりやりすぎて病気になったんですけれども、あれをやった時は、頭の中にあまり情報がつまりすぎて、頭に針を刺したらピューっと何か出てくるんじゃないかというような感じがしてたんですけれども、今だにちょっとあの頃を思い出すと僕は辛いんです。さて、先ほど出てきた解体新書の話なんですけれども、解体新書のもともとのオランダ語の本というのはですね、これはオランダ語で書かれたものから、日本語ではなくて漢文に訳したんですが、我々が読むような、僕らが今日常で使っている日本語は、だいたい、ある学者の説によると、長崎のですね、そこの通詞達が作った言葉みたいです。例えば何とかですとかって言うような言いまわしですね。ですからやっぱり翻訳ですね、翻訳をするために出来てった言葉が、今我々が使っている日本語の原形のようなのです。ですけれども、当時は、日本でも学者と言われるような人はみんな漢文を読みました。漢文っていうのは例えば医学書でも当時は全部漢文でありますし、まあ学者であれば漢文が読めて書ける。喋ることはどうかと思いますが。日本の学者というのは、今だに僕は喋るのは不得意だと思います。でもあの頃にその漢文を読めて書けなかったら学者とは言えなかったと思います。そしてまた、杉田玄白や、前野良沢がですね、漢文に翻訳したということは、一つには漢文というのは当時は東洋の共通語であったから

です。ちょうどニュートンとかライプニッツとかいう17、18世紀ぐらいまでのヨーロッパではラテン語が公用語で学者達はみなそれで通信したんですね。面白い話が残ってますけれども、その話をしますといつ終わるか分かりませんからそれはまた別にしておきましょう。前野良沢さんと杉田玄白さんがですね、お互いに、別々の経路で、ターヘルアナトミアというふうに略称されている本を手に入れた。実はターヘルアナトミアというのは、正確な名前じゃないんです。正確な名前は物凄く長いんです。ドイツ人のお医者さんのクルムスという人がドイツ語で書いた本をオランダ語に訳したやつを漢文に訳したんです。その二つの二人が各々手に入れた本を持ってですね1771年の春です、当時の三月初めですから今の四月の半ばでしょうか、ちょうど今頃ですね、江戸の小塚原という、今の高島平ですかね、あの辺りでしょうか、いやあそこまで行かないでしょうね、そこへ行きました。要するに死刑場です。死刑場で首を打たれたお婆さんの、腑分があるというわけです。まあとても解剖とは言えないでしょうね。それを見に行こうということになりました。前野良沢と杉田玄白ともう一人中川淳庵と三人で出掛けて行きました。この杉田玄白の本と前野良沢の本が両方とも同じ本ばかりでなく全く同じ版でした。同じ版というのは同じエディションですね、解体新書の訳のもとになるオランダ語の解剖学の教科書ですけども、それに照らし合せたんですねえ、実際にお腹や胸を裂いたやつをです。そしたら驚いちゃったんです。その当時まで、勿論解剖というか腑分けを見た人はあの人達が最初ではなくて何人も前にいますけれど、だけれども教科書とつき合せてですね、その教科書には当然解剖図が載ってるわけですが、それとつき合せて見たというのは初めてです。驚いちゃったんです。当時の人は、日本人とオランダ人と違うだろうと思ってたんです。体がですね。ところが、余りにも正確に対応しているんですね。その驚きと、喜びが原動力となって1年半ぐらいで翻訳しちゃいました。

実際出版されたのは、3年半くらい後ですけども、その努力たるや大変なものなんです。あの皆さん方の教科書かなんかでフルヘッヘンドって言って杉田玄白さんが書いているのは嘘っぱちに近い話で、蘭学事始を書いたのは杉田

玄白さんがだいぶ年をとって、記憶力が衰えた頃の様子ですね。辞書はちゃんともってました。前野良沢は長崎へ行って数種類の、この場合には勿論蘭和という辞書は、オランダ語を日本語に訳す為のというのは完成されてないんです。但しアー・ベェー・ツェーのCかDかとにかく相当の所まで翻訳した偉い通詞がおりまして、その人の草稿の写しも持っていました。それから前野良沢は青木昆陽というこれもまた偉い人がつくった単語集を青木昆陽さんから習ってました。僕はその単語集の単語を数えましたけど、確か730いくつだかそのくらいありました。ですからたぶん前野良沢さんは、解体新書をやったころは千何百かのボキャブラリーが有ったと思いますけれども、それに、蘭蘭の、オランダ語をオランダ語で説明した辞書を何種類か持っていました。それでやり遂げたんです。もちろん、2人だけじゃなくて、後になるとだいぶ人が加わっていったんですけれども、基本的には前野良沢が翻訳して、そしてそれを杉田玄白が編集し筆記しました。杉田さんだって大変な努力です、草稿を11回書き直したって言うんですから。その翻訳ができてですね、そして出版する時になって、前野良沢が先程ちょっと言ったように、自分は序文も書かない、それから翻訳者としても名を載せないと言いだしたんです。ですからあの本は翻訳者は、杉田翼となっています、翼と言うのは杉田さんの正式の名前です。一般には杉田玄白と呼ばれてますが。

なぜ、前野良沢が翻訳者であることを、アイデンティファイすることを、拒否したかってのはいろんなことが考えられるんですけど、普通言われているのは、前野良沢が長崎に勉強に行くときに太宰府の天満宮で、菅原道実ですね、学問の神様と言うことになっていますがあそこに行ってお祈りをしたというんです。誓いを立てたというんですね。『私がこのオランダ語又はオランダ学を、勉強するのは自分の名声とか出世とかそういうことの為ではない』と。要するに学問、正しい学問が世に広がってですね、世の中の人がそれでもって幸せな生を享受するように、それだけの為だと。『もし、それ以外の事をやったら、どうぞ神様私を殺して下さい』、という誓いを立てたからだ、というのがひとつの説明です。もうひとつおもしろい話が残ってます。大槻玄沢という人は杉田

玄白と前野良沢の弟子となってますけども、杉田玄白はなにも語学ができませんから、前野さんが教えたんですけれども、大槻家にこういう話が残っているんです。というのは、大槻玄沢がまず、杉田玄白のほうが有名でありますから、杉田さんのところへ行きました。杉田さんは大出世して、大金持ちになりました。年収はものすごかったんです。一番年収があった頃は1800年の頃ですけれども600両というんです、600両というのは、殿様から貰っている給料以外に600両です。当時の1両をいくらに換算するか、換算の仕方によっては100万円というふうに考えたって良いかも知れませんですね、どうみても50万円はありますから、そうすると3億円ぐらいですね、税金なんて有りませんから、ですからそれくらい有ったんです。その杉田と前野の2人の弟子というのが大槻玄沢ですが、その大槻家に伝わっている伝説が有りまして、どういう伝説かと言いますと、杉田先生は自分は何もできないものだから、前野先生のところにまあ習いに行けと紹介状を付けてやったんでしょう、そういうことになっています。その時にですね、前野先生はなかなか弟子に取らなかったんだということです。伝説です、本当かどうか知りません。これは僕らが教員をやってて、教師をやってて、自分の身にひきくらべるとすぐわかるんですけれども、もし前野先生がですね杉田先生を、立派な学者だと思っていたらその人から伝言を付けてきたら、絶対すぐ取りますね。取らなかったということは認めてないって事でしょね。これは公式の記録にはのってなくて大槻家の言伝えにそっと残っているんです。大槻玄沢自身もまっ、礼儀正しい人ですから終世杉田玄白にだって丁重に仕えていたわけですから。こうやって大槻玄沢は、自分の2人の先生に対する本当の評価を自分の家の伝説の中にそっと潜めておいたんだと思います。

で、このお話をもう終えなければいけません。

どっちが偉いかと言うことであります、杉田玄白と前野良沢です。

私の師匠の一人に偉い社会学者でマートンという人がいます。皆さんがたがそのうち社会学コースに進まれたら必ずそのマートンさんの話を聞くようになると思いますけれども、僕の先生の一人です。このマートンという人が科学社

会学を作ったと言ってもいいと思いますけれども、マートンさんは科学史上の偉人といえますかヒーローといえますか、そういう人をどういうふうに考えたらいいいのかという問題を考えました。マートンさんというのは、またこれも凄い学者でありまして、歴史上の大発見を全て調べました。そうして調べてみると非常に同時発見が多いんですね。同時発見というか時を接してですね、別の人が同じ発見をしているのが多い。これをマートンさんは、マルティプルズと呼びました。マルティプルというのは複数という意味ですね。そして一つだけ、一人だけが見つけたというのがシングルトン、一人っ子という意味ですが、でも、シングルトンのほうが科学史上では例外だということを見つけました。じゃあアインシュタインは、またニュートンみたいなですね、大天才っていうのはいったいどういうことか……。マートン先生の立場っていうのは、いつも構造的な立場でありますから、構造論の立場っていうのは極論すれば天才を認めたくない立場であります。天才っていうのは、言わばそれよりも偉くない人の何人かがかかって出来る仕事を一人でやったに過ぎないというのがマートン先生の立場です。ですけれども僕にはこれが本当に正しいかどうか分かりません。確かにニュートンですね、万有引力っていうのはそうだったかも知れません。ニュートンが万有引力を発見した、っていうのは別段発見ではなくてあの当時の人は大体どうもその、物質と物質との間に、例えば天体と天体との間に、質量の積に比例して、距離の二乗に反比例する力が働いているらしいというふうにみんな感じてたんです。みんなっていうか学者達がですね。ただ、証明出来なかったんです。証明出来たのは卓抜な数学者であったニュートンが一番最初であったということですね。ニュートンのこの仕事のすぐ後に問題になったのは、微分積分学、ニュートンの発明といえますかライブニッツのとこれも同時発見ですね。これはもう大喧嘩になりました、どっちが先かってことで。僕らが使っているあのインテグラルの積分記号っていうのはあれはライブニッツのほうの記号です。

そうやって考えてみますと、私が見るところ杉田先生は、とてもそのライブニッツだとかなんだとかっていうのからみたらまあ、小さい、小さいっちゃ悪

いんですけれども、杉田玄白という人は、さっきのマートンさんの考えでいくと、取り替えがきく才能だろうと思います。というのは、誰か他の人で出来るんですね。けれども、前野良沢みたいな人は、取り替えがきかないだろうと思うんです。事実前野良沢は杉田玄白と一緒にオランダ語の勉強をしたいと言って江戸に毎年やってくるあのカピタンに会いに行きました。カピタンには大通詞・小通詞というのが必ず二人ペアで付いてきました。その大通詞にオランダ語を勉強したいって言ったら、おやめなさいって、とてもじゃない私達みたいに子供の時からやってるんだって分らないんですから、って言われました。杉田玄白は簡単に諦めちゃうんです。杉田玄白はやっぱ成功の見込みがなければ、やらない人ですね。でも成功の見込みがあるとなったら物凄い勢いでやります。それに対して前野良沢はやめなさいって言われたら、ますますやるんですね。ですから、ま、使い古された言葉ですけども、ブレイク・スルーが出来たのは前野良沢がいた御陰だというふうに思います。

話がとっちらかってしまいましたけれども、分らないということ、そして分らないことを最後まで突詰めるってということがいかに面白くってですね、あの、価値のあることかということを上上げたかったんです。ただし、出世は出来ません、そういうことをやってたらですね。ですけども、ま、学問というのはそういう側面があるということでもあります。

どうも。

<div>Space</div> <div>Time</div>	Within the System	Outside of the System
Ever Existed	Restoration	Assimilation
Newly Made	Revolution	